

| 派遣国名  | 派遣先大学     | 派遣先所属学部 | 派遣期間                |
|-------|-----------|---------|---------------------|
| マレーシア | マレーシア工科大学 | 建築環境学部  | 2014/8/27-2015/1/20 |

## 派遣実績

### 1. 概要

This paper attempts my study in Malaysia. I was belonging to the course of Urban and Regional Planning. I was studying about how processes town planners design cities. The following is the summary of my experiences in Malaysia that is divided four parts. Firstly, I mention that I learned knowledge about Malaysia before I went to Malaysia. This study was my first time to visit to Malaysia. I did not know about the culture very well, and also could not speak English and Bahasa Malay. I therefore needed to learn various things about Malaysia, for example, culture, language. I was so lucky because I had an opportunity that exchange students from Malaysia taught me Malay and their culture.

Secondly, I refer to the real life there. At Universiti Teknologi Malaysia, I was taking our classes with local students. Two of these are about Environmental Science, and one is titled “Land Use Planning” that you can learn how we plan our cities. The other is that you can study about Landscape Architecture. All of classes were amazing. Especially, the classes about Environmental Science were very interesting to me. These are courses to provide students with the opportunity to address real-world environmental planning and management issues. Students work in a team to develop proposals, conduct field survey by questionnaire, analyze and make recommendations. Through these two classes, I thought the reason why we need to study Environment. In my opinion, that is because the study of Environmental promotes the development of problem-solving skills. Namely, we can learn what to do to protect our environment. At first, I could not catch what lectures were talking about, but I could get used to listen to what people speak English day by day.

Thirdly I talk about the daily life in Malaysia. It is completely different from Japanese one. I had stayed the dormitory in the University. I could not take shower with hot water, and could not make nice meals because we were prohibited using fire. However I made many friends because There were not only local students but also exchange students. The experiences that we shared each other will be long time great memories. Finally, I state my impression of this exchange program. I begin with the reason why decided to go to Malaysia. Last year, I had an opportunity to visit Vietnam and Cambodia. The purpose of the trip was just a pressure, but I learned so much things. Especially how important English is to me. And also it was the doorway to be interested in the Asian countries. Then I thought that I needed to study my major in English abroad. So I decided to study in Malaysia. However, the actual life was severe. Culture, language, food, people, everything was different from Japanese life. I couldn't adapt new life soon. It was difficult to talk in English with others. However, through the new life I found that English is just one of tools to communicate with others. I don't need to English very fluently. It's much more important to learn other culture and to make relationships among people.

## 2. 事前学習（概要・教育効果など）

実際にマレーシアへと派遣される前に、大学側が用意した事前学習及び個人での事前学習を行った。まず大学側で行った事前学習についてだが、こちらは先生方の指導のもと、首都大学東京に留学に来ている派遣先マレーシア工科大学所属の学生と共に行った。マレーシアの文化を教わるほか、簡単なマレー語のレクチャー等も受けた。挨拶や食べ物の名前、数の数え方を教わったが、これは実際の留学生活で食事や交通機関を使い現地の人々と会話をする際に非常に役に立ったといえる。マレー語の会話では、単語を言えば通じるという日本語と似通った点があったため、食事の名前や数字を伝えるだけでコミュニケーションを取ることができた。また、簡単な挨拶ができることは、相手の国を知ろうとしているという印象を与えるため、現地の学生を始め、暖かい対応をして頂くことが多かった。更に、首都大学東京の先生方より、英語でのレポートの書き方を教わった。日本語同様、英語においても、文章の構成方法や接続詞の使い方、動詞の時制など、あらゆる決まりがあることを教わった。留学中レポートを書く際には、その時に配られたプリントや、先生方から受けた注意点を気をつけて書くことができた為、有効な事前学習であったと言える。この学習の延長として、茨城大学及び東京農工大学の学生と共に、環境に配慮した食料供給・技術革新・地域づくりに関連する先生方の講義を受け、出された課題をこなすという学習もあった。今回の留学プログラムにおける目的である、東南アジア地域のあらゆる環境問題を解決に導く人材を育成するための基礎的なレクチャーである。これにより、東南アジア地域が抱える現状を理解することができ、現地での授業に対する基礎的な知識を得ることができた。

また、大学での事前学習の他、個人的にも事前に準備をした。主に、マレーシアが持つ歴史や文化について調べた。マレーシアは他民族国家であり、宗教や言語、食事などのあらゆる面において独自の文化を持っていることがわかった。その中には、礼儀や作法など、日本とは異なる部分も数多くあることを学んだ。事前にこれらを知ることで、実際の生活で現地の方に失礼の無いように振る舞えるため、相手の国を尊重するための事前学習は重要だと感じた。

## 3. 現地大学でのオリエンテーションについて（プログラム・概要など）

現地大学でのオリエンテーションは、各国の留学生が集められて一度に行った。留学生担当の教職員からの挨拶や、スライドを用いた大学紹介等を受けた。さらに、留学生の中で5人程のグループに分けられて、現地の大学生のバディが1グループにつき2人就いた。大学側からの説明としては、このバディが今後の留学生活のあらゆる面においてサポートをしてくれるという事だったが、私たちのバディ2人のうち1人は日本に留学する予定があったこと、さらにもう1人は博士課程にいて研究が忙しいことから、滞在中の特に連絡を取り合うことはなかった。しかし、所属先の学部の担当の先生方、同じ学部、同じコースの学生を5人程紹介して頂いた。この5人はその後もあらゆる面でサポートをしてくれた学生たちである。

オリエンテーション後は、身体測定による健康面のチェックや、履修登録等を行った。この履修登録の時、わたし達5人のコースの登録情報が、所属する実際のコースではなく、別のコースになっているというトラブルが起きた。これは、何人かの学生が、実際に所属していた Urban and Regional Planning コースの授業の他、Landscape Architecture コース等、他コースの授業も取っていたことによるものだと考えられる。こういった些細な間違いは、あらゆる面で見られたため、個人での確認は勿論だが、派遣される学生達の間で情報をきちんと共有することが重要だと感じた。また、何か間違いに気づいた際には、派遣先の大学や、時において首都大学東京側にも報告を行い、確認することが求められる。具体的にあったその他の問題として、寮の滞在費の問題と、ビザ取得及びキャンセルについての問題が挙げられる。まず寮の滞在費の問題だが、首都大学東京側が一括で支払ったという情報が現地の国際科と寮の管理者との間で共有さえておらず、未払いとみなされていた。また、ビザの取得やキャンセルの仕方についてはオリエンテーション等では説明がなかった為、自分で国際科に問い合わせる必要があった。学期末試験から帰国までのスケジュールは意外と余裕がなかった為、留学の初期段階で、学生間で情報を共有しておく必要がある。

4. 派遣先で履修した科目について（単位数・教員名・概要など）

私は派遣先で、4つの授業を履修していた。以下がそれぞれの詳細である。

1. **Environmental Studies**（コース：Urban and Regional Planning Course 2年生）

**教員名：**Dr. Ariva Sugandi Permana, Dr. Irina Safitri Zen **単位数：**2単位

Environmental Studies（環境学）は、実際に世界で起きている環境問題やこれから起きるであろうと予想される様々な被害について学び、またそれらの原因及び解決策について考察することで、都市計画者としてどのようなアプローチをしながら土地開発をしていくことができるかを勉強する授業である。自然環境とは人々の生活を取り巻くものであり、私たち人類はその脅威にさらされながらも恩恵を受けてきた。その自然環境と人間が作った人工物の関係を上手く築くことの重要性や、なぜ環境学を学ばなければいけないかということについて、授業から学びとることが目標である。教授からの講義の他、テーマに沿ったプレゼンテーションやポスターづくり、20ページ程にわたるレポート作成、中間・期末テストによって成績は評価される。

Final grade consists of the following components:

Assignment: 10% - Individual

Thematic Presentation: 10% - Group

Mini Project Report: 25% - Group

Mini Project Presentation: 5% - Individual (member of the group)

Midterm Test: 20%

Final Exam: 30%

TOTAL: 100%

2. **Environmental Planning Workshop**（コース：Urban and Regional Planning Course 4年生）

**教員名：**Dr. Ariva Sugandi Permana, Dr. Irina Safitri Zen **単位数：**2単位

Environmental Planning Workshop は、上記1で説明した Environmental Studies の授業が発展したものである。Environmental Studies は座学が中心で基礎的な知識を学ぶことが中心であったが、この Environmental Planning Workshop では実際にフィールドワークを行い学校の周りで起きている問題を調査し、それに対して評価をし、解決策を考えるという具体的なアプローチをする力は養う。それらは3人程度のグループで行うため、現地の学生と関わることもできる良い機会である。以下が授業の評価の仕方である。

Final grade consists of the following components:

Inception Presentation: 5% - Group

Inception Report: 20% - Group

Final Project Presentation: 5% - Group

Final Project Report: 60% -Group

Peer Assessment: 10%

TOTAL: 100%

3. **Land Use Planning** (コース : Urban and Regional Planning Course 1 年生)

教員名 : Dr. Chau Loon Wai 単位数 : 3 単位

Land Use Planning は、都市開発をする上でどのような事を考慮しなければならないのか、また都市開発が担う社会的、環境的な役割とは何かについて学ぶ授業である。どのような手段・手順で開発を行うか、どのような歳が成長していくか、公共の利益とは何か等あらゆる観点から都市のメカニズムを解いていくことによって、都市開発者を育てることが目的である。授業は座学が中心であるが、教授が作成した非常に解りやすい写真やスライドと簡潔な英語で勧められるため、理解しやすい授業の 1 つである。授業意外にもテストや課題等が出され、総合的に成績がつけられる。

Final grade consists of the following components:

Assignment1,2: 20%(Each) - Group

Quizzes1-4: 5%(Each) - Individual

Final Exam: 40%

TOTAL: 100%

4. **Park and Recreation Planning** (コース : Landscape Architecture Course 2 年生)

教員名 : Dr. Jamil Abu Baker 単位数 : 2 単位

Park and Recreation Planning の授業は、上記 3 つの授業とは異なり、造園コースの授業である。この授業では公園及びそこで催されるレクリエーションを設計するために必要な知識を得ることができる。

Final grade consists of the following components:

Quizzes1,2: 10%(Each) - Individual

Final Report: 30% - Individual

Final Presentation: 50% - Individual

TOTAL: 100%

## 5. 英語による講義へ順応するために工夫したこと

まず、留学へ行く前に事前に準備した事と言えば、無料の動画サイト等で英語圏のネイティブのプレゼンテーションを聞いて英語を聞くことに慣れるようにしたことである。日本で生活をしていると、自然と英語が聞こえてくる環境は少ないため、英語を学ぶ際には意識的に英語を聞かなければいけないと感じたからである。だが、実際に留学してみると、授業を受け始めた頃は、専門性の高い単語やマレーシア人独特の話し方などを聞き取ることはとても難しかった。最初の一ヶ月は授業を受けていても完全には理解できず、聞こえてくる単語と手元の資料を元に授業後に調べることが多かった。しかし、毎回講義を録音するほか、スライド等はできるだけ多く英語でメモを取り、授業後寮に戻って講義を聞き直していた。これにより、英語の抑揚がどのようなものなのかを掴むことができた。また、授業で使うスライドは事前に大学のサイトへとアップされるので、一度目を通しておくと、授業での理解度がより高まると感じた。

また、授業で出される課題は英語を用いてレポートで書くというものが多かった。日本語を考えてから英語に訳するという方法ではあまり英語が上達しないと考えたので、アウトラインの段階から英語で考え、一度自分なりの英語で全体を書いたあと、辞書やインターネットを使ってより良い表現を探すという方法で書くようにしていた。これにより、実際に話す際も、日本語から英語と考えて話すのではなく、始めから言いたい事を英語で思い浮かべられるようになってきたと考えたからである。この方法は非常に難しく、完璧にこなすことはできなかったが、今後も続けていきたい。

## 6. 寮での生活について

マレーシア工科大学は、莫大な敷地を持っており、また、全寮制の大学であるため、授業を受ける建物だけでなく学生の為の寮も多く建っている。寮も色々な所に点在していた。私が滞在していた寮は8階建ての女子寮であり、7階にある1人部屋を使わせて頂いていた。すぐ近くには男子寮、男女混合の寮があり、どれも留学生が多く使っていた。私の寮は大学の中でも授業を受ける建物からは徒歩40分程度離れていたため、大学側が運営している無料のバスを使用して通学していた。また寮の中にコンロや電子レンジ等はなく、トイレやシャワーは共同で使用していた。選択に関しては、洗濯機は有料であるため、手洗いと交互で行っていた。寮には現地の学生も住んでいるため、友達を作る場でもあった。マレーシア工科大学の学生だけでなく、大学の近くにある専門学校に通っている学生も住んでいた。イスラム教徒のお正月は寮と一緒に祝いのお食事を食べるなど、貴重な経験をすることができた。

食事は、寮から大学の外に出るとすぐにある飲食店でとるか、電気で使える鍋を使って日本食を作って食べることが多かった。食材等は、寮からバスもしくはタクシーでいけるイオンで調達していた。

また、寮周辺は自然が多くて景色も良く、非常に快適であるが、夜は冷えるほかとても暗くなるため、出歩くことは危ないと感じた。現に、ガードの方達も女性がひとりで出歩くことは控えた方が良いと言っていた。なお、丈の短いパンツ等、肌が出る服装はガードに注意されるため、こちらも同様に控えるべきである。

## 7. 課外活動など休日の過ごし方について

私が履修していた授業の数は全部で4つであったため、毎日授業があるわけではなかった。普段学校が無い日は、大学の学部専用の図書館や自習室で課題等を行うことが多かった。寮のネット環境はあまり安定しておらず、通信速度が非常に遅いためである。同様に、現地の学生と一緒に課題をやることもあった。全寮制の大学などで、グループワークがある時は、授業後に現地の学生が滞在している寮の食堂等で一緒にレポートを書いた。課題が無く時間があるときは寮でDVDを観たり、学部が主催するスポーツ大会に出たりなど、趣味を楽しむことも多くあった。

また、中間休み等、普段よりも長い休みがある期間は、国内旅行及び国外旅行をした。マレーシア国内ではクアラ Lumpur、マラッカ、ペナン島を訪れ、滞在していたジョホール・バルとはまた違ったマレーシアの雰囲気を楽しむことができた。さらに、国外では、ベトナムや、ジョホール・バルからすぐ近くのシンガポールを観光した。同じ東南アジアの中でも、国によって国民性はもちろん文化、歴史的背景などは全く異なるため、それらについて学ぶこともできて非常に為になったと感じる。

## 8. 成果と反省点（当該プログラムで得られたことを帰国後の研究へどう活かしたいかという今後の意向についても述べてください）

今回私が留学に応募した理由は、土木工学を専攻する学生として、英語力を身につけたいというものである。大学生として土木工学の専門教科を学び、また趣味の旅行で他のアジアを訪れる内に、将来は、国内はもちろん国外においても、日本の工学の技術を他の国と共有しさらなるアジアの発展を目指すことに関わる仕事をしたいと考える様になった。こういった目標から、英語の必要性を再確認し、留学することによってそれらを向上したいと考えていた。

結果的に、上記に示した留學生活や授業での工夫等から、留學前よりも英語力は上がったと感じる。しかし、私の留學生活において、英語の勉強に励むことと同じ程度大切だと感じたことはもう一つある。それは、相手の文化を知り、認めることの重要さである。実際のマレーシアでの留學生活は、想像していたものとは異なり、不便だと感じることも沢山あった。例えば、トイレやシャワーを始めとする生活の基礎的な物から、人同士の関わり方等、文化の違いを感じる所は沢山あった。始めはそれらの日本と違う所に慣れることは難しく、日本が懐かしいと感じることもあった。日が絶つに連れて段々と、自分は外国人であること、そして、慣れと工夫でどうにかなる様な日本と違う部分を気にして、新しい環境から何も得ようとしなないことは愚かであると思ひ始めるようになった。そこからはマレーシアの国の歴史や、宗教が人々にとってどういった存在であるのか、現地の人々は何を大切にしているのか等を勉強するようにした。多くの人と関わる程、日本との違いを知り体験することは面白く感じ、相手の国を認めることの重要さを認識した。また、学生との会話では恋愛の話や流行っているカフェの話など、万国共通とも言える話題で盛り上がることもあり、どの国の女子大生も変わらないのかもしれない、と思うこともあった。

もともとは英語や自分の専門科目など、学業の為の留學と思っていたが、こうした経験から、流暢に英語を話すよりも、相手の文化を理解し、少数はである外国人としてどう絶ち振る舞うかを考え、相手との間に良い人間関係を築くことの方が大切だと思うようになった。

現時点で私の夢は、変わらずに、日本だけでなく海外においても土木工学に関わる分野で働くことであるため、今後とも多くの国を訪れ見識を深めたいと思う。その際は、マレーシアでの経験を踏まえ、自分が外国人として何を知るべきかを熟慮し、相手の国を敬う気持ちを忘れないようにしたい。また、英語に関しては、残された留學生活でより上達出来る様に努めたい。

## 9. 次年度以降の派遣学生へメッセージ

留學と一言に言っても、滞在する国によって文化も違えば、自分自身の性格によって、どんなところに楽しさ。大変さを感じるかもそれぞれである。つまり、自分が体験する留學生活とは自分だけのものだという事である。これは、どんなに大変なことがあり、周りの協力が得られる時でも、最終的に努力しなければいけないのは自分であるという事を意味する。また、そこで体験できる外国での生活や一緒に過ごす現地の友達、ふとした瞬間の感動等、多くのプラスの面での出来事も自分だけの財産になるという事である。

留學とは、英語を勉強することは勿論だが、それ以上に自分を見つめる大きな機会でもあると私は思う。社会的責任も無く、失敗が許される学生であるからこそ、何事にもチャレンジし、自分がやりたいこと、自分にしかできないことを見つけていく必要がある。